

## 記念誌「相中相高百年史」 ” 思い出の記 ” より

## 幸せな世代の四十二回

中42回卒 立谷 純一 (※1)

我々四十二回生は、既に古希を迎えた者もあるが、大半は誕生日がきて古希を迎える事になる。そして、相中を卒業して五十年以上を過ぎた所である。後ろを振り返ることもなく、まっしぐら突き進んできた所ではあるが、この辺からは楽しく余生を過すことも考えたいものである。

我々が小学三年の時に二・二六事件があり、五年の時に日中戦争が始まった。そして、太平洋戦争開戦の昭和十六年十二月八日は相中三年生の時であった。その日、全生徒が長友に集められ、従五位勲六等と云う厳めしい肩書の吉田廣佐校長から訓話があった。日本は、欧米諸国の侵略からアジア諸国を救って、大東亜共栄圏を確立するため立ち上がった。既に中学生は天皇陛下のお役に立つため、強靱な心身を鍛えておかなければならないと云うことであった。

我々は小学校以来、最高の軍国主義の教育を受けて育ったのであった。中学四年の時、一年上級までは京都奈良の修学旅行があったものを、その分として、翁島兵舎訓練が実施された。軍隊生活の厳しさ辛さをいやと云う程体験させられた。

然し、軍人はあらゆる職業のうちで最も尊敬される時代であった。特別の理由のない者は殆ど職業軍人に憧れていた。同級生のうち、幼年学校には渡部敬太郎 (※2) 君、海兵には岩崎英雄 (※3)、齋藤修亮 (※4) 君、陸士には藤田充 (※5)、荒大 (※6)、荒嘉隆 (※7)、鈴木宏 (※8) 君が合格した。彼等は大変な努力もしたが、社会からは尊敬され、学生間でも英雄的存在であった。味噌醤油醸造屋の一人息子としての私にはまことに羨望の的であった。

昭和二十年八月十五日の終戦はすべてをひっくり返してしまった。海兵に行った岩崎君は磯部に帰って漁師をしていたが、私の家には時々遊びに来てくれていた。或る時、東北大に水産科ができるから受けてみようかと云って来た。あとで、水質汚染とか、水質と藻の関連とかが世の脚光を浴びようになるとは誰も考えていなかった。彼には「つき」もあるうが、それを最高に生かした所に偉大さがあった。まさに、同級生の誇りの一人である。

荒大君は柏崎に帰って農業をしていたので、よく遊びに行ったり来たりしていた。あとで自衛隊に入り忽ち出世をいった。私が中村二小焼失時のPTA会長時代、幸い、船岡の隊長で学校再建に大変なお世話になったのであった。二人以外の詳細わからないが、皆、夫々、どん底からはい上り新たな道を開拓し成功しているようである。

勉強にしろスポーツにしろ、あの時代、あの厳しさに堪えた訓練が人生に大いに役立っているのではないだろうか。私にしても、二年生までは「筋骨薄弱要註」と通信簿に書かれていたが、一生懸命に柔道をやって、卒業の頃には誰にも負けなくなったのであった。そしてこの自信こそが、程々に生きてこられた原動力だったと思っている。原釜から学校までの五・五キロを歩いて通い、その上、授業前と後と柔道の稽古をしたのであった。あの時は、それ程つらいとは思っていなかったような気がする。

我々は軍国主義も民主主義も共に経験した。貧乏のどん底も現在のこの豊かさも共に味わっている。「若い時の苦労は買ってでもしろ」と云うが、若い時代に苦労をして、豊かな晩年を迎えつつある。幸せな世代と云うべきではないだろうか。

(※1) 昭和19(1944)年卒 中村出身

(※2) 中村出身

(※3) 磯部出身

(※4) 亙理出身

(※5) 太田出身

(※6) 飯豊出身

(※7) 日立木出身(現姓阿部)

(※8) 新地出身